慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『うけらが花』に於ける恋題拡充の一方法
Sub Title	
Author	山本, 令子(Yamamoto, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.27 (1998. 3) ,p.39- 47
JaLC DOI	10.14991/002.19980300-0039
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980300-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『うけらが花』に於ける恋題拡充の一方法

山本　令子

一、はじめに

橘千蔭の家集『うけらが花』は、千蔭の自撰に拠る「初編」が享和二（一八〇二）年に、次いで門人一柳千古が書き留めておいた、享和二年以降文化四（一八〇七）年に至る歌文を纏めた「二編」が文化五（一八〇八）年に刊行された。両編共に、巻一春歌、巻二夏歌、巻三秋歌、巻四冬歌、巻五恋歌、巻六雑歌・雑体、巻七長歌・文詞から成る。村田春海と相並び、江戸派を領導した千蔭らしい、洗練された優美さの漲る佳編である。

本稿に於いては、『うけらが花』両編の巻五恋歌に見える題に就いて検討を加え、その設題意識の一端を探りたい。千蔭も又、江戸派一般の例に漏れず、叙情よりは寧ろ叙景を得意とし、恋や哀傷の歌は四季の歌ほどの秀逸さに欠けると云われる。[1] 然しながら、その詠作の評価はともかくとしても、設題には注目すべき点も存するかと思われ、その意図する所を考えてみたい。

二、『うけらが花』恋部の構成

まず、『うけらが花』両編に於ける巻五恋歌の構成をおさえておきたい。

「初編」の恋部は、おおよそ次の様な構成を成していると考えられる。[2]

①一般的な複合題を主とする歌群（九六六～一〇六八）
②素題「恋」一首（一〇六九）
③「寄物恋」歌群（一〇七〇～一一〇〇）
④散文的な題を主とする歌群（一一〇一～一一三五）
⑤六帖題歌群（一一三六～一一六三）
⑥古歌の「返しの心」の歌群（一一六四～一一六七）

①にいう一般的な複合題とは、「初恋」（九六六～九六七）「忍恋」（九六八）といった単純な結題の他、「雪中恋人」（一〇六一）「雪の日人を恋ふる」（一〇六二）といった広義の句題をも含む概念である。又、④にいう散文的な題とは、甚だ熟さない言い廻しではあるが、「いかでと思へども色に出でがたき女にといふを題にて」（一一〇三）「女にいきて物いはんといひければ、きても何事をかといひけるにといふを題にて」（一一〇四～一一〇五）といった類のものを、今、仮に称した。厳密には、①の歌群の中にも、散文的な題を詠む物（一〇〇八・一

〇一四・一〇一五）が散在し、④の歌群の中にも句題的な物（一一二六・一一二七～一一二八・一一二九）が内包されてはいるが、恋部の全体像を捉えるために、敢えて大まかに分類した。

右の如き「初編」の構成を享けて、「二編」の恋部も又、ほぼ同様の構成を見せる。

①素題「恋」三首（九三九～九四一）
②一般的な複合題を主とする歌群（九四二～九九六）
③「寄物恋」歌群（九九七～一〇一二）
④散文的な題を主とする歌群（一〇一三～一〇二八）
⑤六帖題を主とする歌群（一〇二九～一〇五七）
⑥古歌の「返しの心」一首（一〇五八）
⑦当座の贈答の「返し」二首（一〇五九～一〇六〇）

尚、「こぬ人たのむ」（一〇二九）「中そらにのみ」（一〇三〇）の二題は『古今六帖』の分類題の中には見出せないが、六帖題的な趣きを持つものとして、これに準じて扱った。

以上の分類の内、④に見える散文的な題、及び⑥に見える古歌の「返しの心」を詠じる試みは、他にはあまり例を見出だし難い、独自なものと思われる。従って、以下では、これらの題に就いて少しく検討を加えたい。

三、散文的な恋題に就いて

先述した如く、『うけらが花』両編恋部には散文的な題を詠じた歌群が認められる。そして、その多くは、三十六人集や後撰集、拾遺集を中心とする古歌集の詞書に依拠したものと憶しい。それらを、次に挙げる。（当該歌が複数の歌集に重出する場合、詞書の文言が『うけらが花』の記述により近いと思われるものに拠った。尚、現時点では、各歌集に就いて、千蔭が披見した本文系統を特定するのは困難である為、便宜上、新編国歌大観所収本に拠って、本文を掲出した。）

【うけらが花初編】

歌番号	題・詞書など
一〇〇八	人のもとより暁にかへりてといふを題にて
後撰集七二九	人のもとより暁かへりて（冬・嗣）
一〇一四	すまずなりにける女の、人に名立ちければつかはしけるといふ心を
後撰集五九六	まからずなりにける女の、人に名たちければつかはしける（信明）
一一〇一～一一〇二	物おもふころひとりごとにといふを題にて
宗于集四～六	物おもふころのひとりごとに
一一〇三	いかでとおもへども色に出でがたき女にといふを題にて[3]
清輔集二八七	いかにとおもへど、色にいでがたき女に
一一〇四～一一〇五	女にいきて物いはんといひければ、きても何事をかといひけるにといふを題にて
兼盛集八五	女にいきて物いはんといひければ、きても何事をかと云ひたるに
一一〇六	久しくこずとてふすべて出でぬ人にといふを題にて
元真集三二一	ひさしくこずとてふすべて、こぬひとに

〜三二三	われをしりがほにないひそと有りければといふを題にて
一一〇七	我をしりがほに人にいふなといひ侍りける女にといふを題にて
一一〇八	我をしりがほにないひそと女のいひて侍りける返事に(躬恒)
後撰集 一〇八四	われをしりがほにいふなといふ女に[4]
躬恒集三二七〜三三一	忘れぬなめりとみえし人にといふを
一一〇九	わすれぬるなめりとみえし人に
小町集三一	あり所しらせぬ女にといふを
一一一〇	あり所しらせぬ女に
元輔集二一九	しのびたるをとこ雨のふる夜まで来てぬれたるよし、帰りていひおこせければといふを題にて
一一一三	しのびたるをとこのあめのふるよまうできてぬれたるよしかへりていひおこせてはべりければ(和泉式部)
後拾遺集 九二五	けさうし侍りける人の家のまへをわたるとていひ入りけるといふを題にて
一一一九	けさうし侍りける女の家のまへをわたるとて、いひいれ侍りける(詠人不知)
拾遺集六八七	けさうし侍りける女のさらに返事し侍らざりければといふを
一一二〇	

拾遺集六七〇	けさうし侍りける女の、さらに返ごとし侍らざりければ(実方)
一一二二	文かよはしていとひさしく成りぬれどつれなき人にといふを
兼盛集五三	ふみかよはしていと久しく成りぬれどつれなき人に
一一三〇	雨ふるとてとはぬ人のふらぬにもみえねばといふを
小大君集 一〇二	あめふるとてこぬ人の、ふらぬにも見えねば
【うけらが花二編】	
一〇一三	おもひかけたる人のねたるを見てといふを題にて
実方集一五二	おもひかけたる人、ねたるを見て
一〇一六	くれをたのみてこざりける女のもとへいさむるひとありときゝてといふを題にて
新和歌集 六二〇	くれをたのめてこざりける女のもとへいさむる人ありときて(信生)
一〇二〇	女にものがたりなどしけるほどにとりのなければといふをだいにて
万代集 二二〇七	女にものがたりなどしけるほどに、とりのなきければ(業平)
一〇二三〜 一〇二四	しのびてかよひ侍ける人のいへの柳をおもひやりてといふをだいにて
躬恒集三五七	しのびてかよひはべりけるひとのいへの、や

～三五八	なぎをおもひやりて
一〇二六	物いひける女に蟬のもぬけをつゝみてつかはすとてといふこゝろを
後撰集七九三	物いひける女に、せみのからをつつみてつかはすとて（重光）
一〇二七～一〇二八	をとこのもとよりあふぎをえたる女にかはりて
兼輔集三五	をとこのもとよりあふぎえたる女にかはりて

注目されるのは、参照された古歌が、その詞書から判断する限り、歌合や歌会、或いは屏風歌といった晴の場に於ける題詠歌ではなく、実生活の一場面で詠まれた褻の歌であると思われる点である。すなわち、幾分かの文学的虚構をまといつつも、そこには王朝の恋愛の現実がかいま見えるのである。千蔭の歌は、そうした昔人たちの恋の状況を借り用いることに拠って、彼らの立場に身を置き詠み出されているのであり、そこに、この様な題を設定した眼目が認められるのではなかろうか。

四、古歌の返しの心に就いて

先述した如く、「初編」巻五恋の巻末歌群は、古歌の「返しの心」を詠じたものである。

後撰集の、木のはちる山のした水埋れてながれもやらぬ物をこそおもへ、といふ歌の返しの心を

おぼろげの水のながれやいささめにちる木のはにもよどむなるらん　（一一六四）

同じくあだにみえ侍りける男に、こりずまの浦のしら浪立出でてみるほどもなく帰るばかりぞ、と有る歌の返しの心を

すまの浦の松の嵐のはやければよどみもやらでかへるなみかな　（一一六五）

おなじく、今はてふ心つくばの山みれば梢よりこそ色ははりけれ、といふ歌の返しのこころを

つくばねのしづくてふ名は涙にてかはるは袖のいろにざりける　（一一六六）

後拾遺集の、しのびつつやみなんよりはおもふ事ありけるとだに人にしらせん、といふ歌のかへしの心を

山のゐのやまんよりはときくからに浅きこころを汲みてこそしれ　（一一六七）

この内、一一六四番歌の詞書に「後撰集の」とあるのは、「後拾遺集の」の誤りであり、『後拾遺集』六〇五番歌・叡覚法師詠に対する「返しの心」を詠じたものである。以下、一一六五番歌は『後撰集』八〇〇番歌（詠人不知）の、一一六六番歌は『後撰集』六七四番歌（詠人不知）の、一一六七番歌は『後拾遺集』六一〇番歌（大江嘉言詠）の「返しの心」を詠んでいる。

一方、「二編」恋部に於いて、古歌の「返しの心」を詠じているのは、一〇五八番歌に「初編」一一六五番歌が重出している一例に留まる。

古歌の「返しの心」を詠じた早い例としては、『拾遺集』恋部に見える、順が万葉歌に追和した二首を挙げることが出来る。

万葉集和し侍りけるに

おもふらむ心の内をしらぬ身はしぬばかりにもあらじとぞ思ふ　（拾遺集七五七／抄二八八）

万葉集和し侍りける歌

なみだ河そこのみくづとなりはててこひしきせぜに流れこそすれ　（拾遺集八七七）

これらに就いて、『袋草紙』は「或万葉古語ヲ翻和になせる也云々。或万葉歌ヲ為二本歌一詠二返歌一也。予案」之返歌之儀歟。」と記し、返歌説の立場から本歌を指摘している。

千蔭の試みは、いわゆる仮名句題の延長線上に位置する物と捉えることも出来よう。『うけらが花』両編にも、仮名句題を詠じた例が散見される。ただ、これらの古歌が各れも、当該勅撰集に於いて、その返歌を記すことなく、単独で置かれていることは興味深い。すなわち、その「返しの心」を詠じることは、自らをその受け手の立場に置き、一つの贈答を完結させる営みにほかならない。前節で検討した如き、古歌集の詞書に基づく散文的題と重ね合わせるならば、これらも又、昔人たちの実生活に於ける恋愛を仮想体験する装置であったと云えよう。ここに於いて、古歌の返しの心を詠じることは、単なる仮名句題とは一線を画すのではなかろうか。

五、『琴後集』と共通する歌題に就いて

村田春海の『琴後集』巻五恋歌を繙くと、僅か二例ながらも、『うけらが花』と共通する散文的題を拾うことが出来る。

ふみかよはして久しくなりぬれどつれなき人に　（琴後集九三四）

文かよはしていとひさしく成りぬれどつれなき人にといふを　（うけらが花初編一一二二）

雨ふるとて来ぬ人のふらぬにもみえねば　（琴後集九四九）

雨ふるとてとはぬ人のふらぬにもみえねばといふを　（うけらが花初編一一三〇）

又、『琴後集』では巻六雑歌に収められてはいるものの、次の如き例をも見出すことが出来る。

ものおもふ比ひとりごとに　（琴後集一二〇五）

物おもふころひとりごとにといふを題にて　（うけらが花初編一一〇一～一一〇二）

『琴後集』に於いては、『うけらが花』に見える「といふを」「といふを題にて」の文言が略されているものの、同一の歌題を詠じたものと見做せよう。こうした共有歌題の意味を考えるにあたって、手掛かりを与えてくれると思われるのが、次の七夕歌群である。

【うけらが花初編巻三】

ふ月七日、家家のしふどもの題をひろひいでてよめる歌七つ

七日、をみなへしをうゑよとて人のおこせたれば

あふ星をためしにはしてこよひより千秋にほほえむ女郎花かな　（五二一）

七日、けふの空のけしきいかがみるといひければ

けふといへば其数ならぬかがせ男もいかがは暮を待たざらめかも　（五二二）

たなばたまつりしたる所に笆のもとに男たてり
神よより契たがへぬひこ星にたぐへぬものかこよひとふとも　（五二三）
七日の夜、琴ひくをんな有り
たなばたのあふよのにはのことのねを雲ゐにさそふ松風もがな　（五二四）
なぬかの夕べ男あまたゐて天河をみたり
久かたの天つ契をうつせみのこころこごろになぞへてぞ見る　（五二五）
七日、女ども空をみる
夕月もくまなきよひの天河おもふあたりにいかがみゆらむ　（五二六）
なぬかの夜あかつきををしむ
天人のま袖もりてや世中のあかつき露はおきそめぬらむ　（五二七）
七夕、秋の七くさをよめる
たなばたの紐とくよひやささらがた錦ににたる萩もさくらむ　（五二八）
天河かはべに立ちてまねくらむひれかとみゆるはつ尾花かな　（五二九）
彦星のあかぬ別にまつはりて引きもとどめよ庭のくずばな　（五三〇）
たなばたのいほつつどひの白玉のちりかみだるるなでしこの露　（五三一）
天河あかで別れしうつりがをしばしとどむる藤ばかまかな　（五三二）
たなばたの心を汲みて此朝け露おもげなるをみなへしかな　（五三三）
たなばたのおもなさみえて霧深き笆ににほふ朝顔の花　（五三四）

【琴後集巻三】

七夕七首
七日をみなへしをうゑよとて人のおこせたれば
をりにあふ名もなつかしき女郎花たなばたつめにたぐへてをみん　（四九七）
七日けふの空のけしきいかがみるといひければ
天の河ゆふゐる雲もうちつけにたなばたつめの袖かとぞ見る　（四九八）
たなばた祭りしたる所に籬のもとに男たてり
たなばたに今宵手向くるから糸のよりあふ末や誰むすぶらん　（四九九）
なぬかの夜琴ひく女あり
たなばたの心をくみて引くことやつまおもふてふしらべなるらん　（五〇〇）
七日のゆふべをとこあまたゐて天の河をみたり
もろともにゆきてみましを天の河うききのかよふ道したえずは　（五〇一）
七日女ども空をみる
たなばたのあふ夜はれ行く空の月よそにみるさへおもなかりけり　（五〇二）

七日の夜暁ををしむ
暁のそらかきくもれあまの川あさ瀬たどらば君かへらめや　（五〇三）

七首
七日の夜秋の七くさをよめる
たなばたに今宵やかさん秋はぎの花ずり衣いろあせぬ間に　（五〇四）
天の河かはべのをばなかたよりになびくもほしの心をやとる　（五〇五）
たなばたの袂おぼえて秋風のふきうらがへす庭のくずはら　（五〇六）
たなばたの袖のにしきもかくこそと見るめもあやにほふなでしこ　（五〇七）
今宵しもたなばたの手にあえよとて誰たちぬへる藤ばかまぞも　（五〇八）
棚機のおもかげみせて沢水にすがたをうつすをみなへしかな　（五〇九）
ほし合のなごりをそれとしのべとや露にしほれし朝がほの花　（五一〇）

これらは、七夕にちなみ、次の古歌集の詞書から設題されたと憶しき七首と秋の七草を詠じた七首とから成っている。

①馬内侍集一八四
おなじ日、女郎花をうゑよとて人のおこせたれば
ひこぼしにしのぶるひとやかよふらんけふしもにほふをみなへしかな

②馬内侍集一八三
七月七日、けふのそらのけしきいかがみるといひたりければ
なげきつつあまの河なみながむればたえまがちなる雲ぞわたれる

③拾遺集一〇八三
円融院御屏風に、たなばたまつりしたる所にまがきのもとにをとこたてり（兼盛）
たなばたのあかぬ別もゆゆしきをけふしもなどか君がきませる

④拾遺集一〇九〇
おなじ御時御屏風、七月七日夜ことひく女あり（順）
ことのねはなぞやかひなきたなばたのあかぬ別をひきししめねば

⑤貫之集三六五（おなじ七年右大臣殿屏風のうた）
七日ゆふべ男あまたゐて天河みたる
大空はひもなけれどもたなばたをおもひやりてもながめつるかな

⑥貫之集一五二（延喜二年五月中宮の御屏風の和歌）
七月七日女ども空をみる
人しれず空をながめて天河浪うちつけにものをこそ思へ

⑦基俊集一五〇
たなばたあかつきををしむ
七夕の雲の衣の袖ひちてをしむ空なき朝ぼらけかな

『うけらが花』の詞書には「家家のしふどもの題をひろひい

でて」とあるものの、題詠には限らず、恋歌同様、褻の歌の詞書を取り用いたものも含まれている。又、③に挙げた兼盛歌、④に挙げた順歌に就いては、家集の詞書に拠ったとは見做し難く、『拾遺集』の詞書を用いたかと思われる。[5]

右の如き歌群としての一致は、千蔭、春海の両名が共に参会した場――おそらくは七夕歌会の存在を示唆するものであろう。[6]恋歌に於ける歌題の共通も又、偶然の一致とするよりは寧ろ、場の共有を想定すべきではなかろうか。そして、これらの試みが、『うけらが花』により多く認められることや、千蔭一人が古歌の「返しの心」をも詠じていることなどは、千蔭の側により積極的な文学的動機があったとの憶測を逞しくさせるところではあるが、『琴後集別集』をはじめとする『琴後集』非所収歌の問題[7]もあり、今はさて措きたい。各れにせよ、千蔭のみならず、春海も又、こうした試みの一端を担っていたことは注目される。

六、おわりに

以上、見てきた如く、『うけらが花』恋部には、古歌集の詞書に基づく散文的題や古歌の「返しの心」を詠じる試みが認められる。それは、和歌が実生活と乖離し、恋歌が観念的・空想的な物にならざるを得なかった時代、換言すれば、虚構の恋を詠じる題詠が恋歌を覆い尽くそうとする時代にあって、新たな恋題を開拓し、なおかつ、そこに何がしかのリアリティーを与えようとする営みであったのではなかろうか。

とかく見るべき物に乏しいとされる江戸派の恋歌ではあるが、千蔭そして春海という両巨頭が、こうした恋題拡充の試みに意欲的に取り組んでいることは、顧みるに値しよう。春海の門人にあたる清水浜臣が王朝物語の設定を借りて恋歌を詠じていると憶しい[8]ことも、こうした流れの中に位置付けることが出来るかと思われる。この他の歌人に就いても、稿を改めて考えていきたい。

注

和歌の引用は、新編国歌大観に拠ったが、一部表記を改めた箇所がある。尚、『うけらが花』「二編」に就いては、版本を用い、私に、濁点及び歌番号を付した。

(1) 佐佐木信綱氏『近世和歌史』第五章江戸派（博文館・大正十二年／佐佐木信綱氏歌学著作覆刻選・第四巻・本の友社）、児山信一氏『新講和歌史』近世 第三章 天明期（大明堂書店・昭和六年）、伊藤正雄氏『近世の和歌と国学』九 江戸派の人々（皇學館大學出版部・昭和五十四年）など。

(2) 以下の恋題の分類にあたっては、諸先学の御論考を参考にさせて頂いた。殊に、松野陽一氏「平安末期の百首歌について」（『東北大学教養学部紀要』第二十五号・昭和五十二年二月）が提唱された概念・名称に拠らせて頂いた処が多いが、寄物題に就いては一般の複合題と区別するなどの私意を加えた。

(3) 春海門下の清水浜臣の家集『泊洒舎集』六五〇番歌詞書には、「いかでとおもへど色に出がたきをんなに」とあり、千蔭の孫弟子（千古門下）にあたる、井上文雄の家集『調鶴集』七四一番歌詞書にも、「いかにと思へど色にいでがたき女に、といふことを」と見える。

(4) 書陵部蔵御所本（新編国歌大観第七巻所収）に拠る。

(5) 当該歌の家集における詞書は、各々、「（うちの御屏風のれう、）七月七日女庭にいでてたなばたまつりす、まらうどきてまがきのも

とにやすらふ」（兼盛集一八五）「（右兵衛督ただぎみの朝臣、あたらしく調ずる屏風のうた、）七月七日、庭にいとひく女あり」（順集二三二）となっており、『うけらが花』及び『琴後集』に見える題と直接には結び付き難い。

（6）千蔭と春海の文学的交流に就いては、岩崎敏夫氏「千蔭、春海、濱臣、雄風、為貞の歌―柳田為貞の遺稿の中から―」（『日本文学論究』第四十六号・昭和六十二年三月）が紹介された為貞自筆歌稿の中に、両者が同席した歌会の記録が多く見える。又、白井忠功氏「村田春海覚え書―『琴後集』について―」（『立正大学大学院紀要』第五号・平成元年二月）は、『うけらが花』に見える春海に関わる詠歌及び『琴後集』に見える千蔭に関わる詠歌を整理されている。

（7）田中康二氏「『琴後集』撰集攷」（『近世文芸』第五十九号・平成六年一月）に詳しい。

（8）拙稿「『泊洒舎集』に於ける古典摂取の一側面」（『三田國文』第二十六号・平成九年九月）。

（やまもと　れいこ）